

タイトル:平成 29(2017)年度 教育セミナー(第 13 回)

日時:2017 年 9 月 14 日(木)~17 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室(303)

「カザフスタン史への東西からのアプローチ」

野田 仁(AA 研)

本報告では、これまでの自身の研究内容を振り返りつつ、とくに歴史学と地域研究のかかわりを意識しながら、中央アジアとくにカザフスタン史をどのように考えることができるのかを考察した。

まず、中央アジアの地域性として北部の草原地帯と南部のオアシス地帯に分かれることに触れ、そのうち草原地帯の歴史については、とくに前近代においては史料の乏しさがネックとなり困難が多いことを示した。したがって十分な史料が得られる 18 世紀以降を対象とすることになるのだが、報告者の関心は国際関係・対外関係にあり、18-19 世紀のカザフ草原を中心とした国際関係史をおもなテーマとすることになった。

その中で、ロシアと清朝の 2 帝国の公文書史料に加え、さらに新疆辺境にいたタタール人による歴史書の視点を加えることで、カザフに対する 2 帝国の視線を相対化し、むしろカザフの視点からこの時期の国際環境の変化をどのように乗り切ろうとしたのかが明らかになることを示した。具体的にはカザフを中心に据えた露清関係との三角関係を設定し、さらにその関係の二重性をモデル化したのである。それによりカザフの移動性、またカザフ草原と新疆北部の歴史的結びつきを明らかにしたのであった。

カザフ時代を三角関係の構図は前後の時代にも応用可能であったことを示し、18 世紀前半のウイグル事件、19 世紀末の近代日本と中央アジアの関係、20 世紀における新疆の文字変遷と言語政策の影響、1940-50 年代の新疆からトルコへの難民等である。並行して、科学研究費や研究所等のプロジェクトベースで研究を進めたこと、カザフスタンや新疆で行ったフィールドワークの成果(気象などの遊牧のための条件、旧ソ連の空気)などにも言及した。また、歴史学と地域研究の結びつきについても述べた。

上記の既存の研究に対して、そこから発展しうる今後の研究の可能性について最後に述べた。すなわち、国境線・境界の問題であり、そもそもロシア・清朝間の境界・領域概念には大きな違いがあり国境画定のプロセス自体も研究の余地を大きく残しているが、報告者は派生する諸問題の中でとりわけ国境を越える紛争解決と司法制度の分析の取り組みに関心を抱いており、カザフの慣習法を媒介とする国際紛争解決の仕組みについて、改めてカザフ草原と新疆北部の結びつきを振り返りつつ説明を行った。